

マナ

橋本 茂

最近、私は猫を飼い始めました（あるいは、猫と一緒に生活し始めました）。その名をマナと言います。私は小さいときからいろいろな動物を飼ってきました。小鳥では、めじろ、うぐいす、しじゅうがら、ひばり、すずめ、かなりや、いんこ等です。魚は、めだか、どじょう、ふな、ナマズ、こい、金魚（特にらんちゅう）などです。しかし、猫は初めてでした。ある日突然、娘が「はい、あげる」と、物のようにくれたのがこの猫でした。

毛のフサフサしたとてもかわいい小猫（チンチラ）です。何の心の準備もなしに飼い始めたものですから、私たちも猫も大変でした。お風呂に入れるのはいいのですが、十分に乾かしてあげなかったために、風邪を引かし、病院に駆け込んだり、また、気が付いたら、体中、蚤でいっぱいとなり、それがジュウタンに落ち、私と下の娘が50ヶ所以上喰われ、そのかゆさにか月以上悩まされたりしました。（なぜ妻と息子が蚤に喰われなかったのか不思議ですが）。すべてが初めてですから、ハラハラドキドキの連続でした。今では、そんなこともなくなりました。

こんなに面倒を見ているのに、猫は呼んでも、少し耳をびくと動かして、知らんぷりしています。かと思うと、ワープロで仕事をし

ていると、好奇心まるだしで目を輝かして、キーボードを叩く手にジャレ付いて邪魔します。電話をかけていると突然切れたので見たら、電話機のボタンの上に腰掛けてすましています。昼寝をしていると、ヤスリのような舌で私の広いおでこ（頭？）を舐めます。本当にやりたい放題の勝手な動物です。

しかし、多くの場合、私が書斎に入ると、いつのまにか、1.5メートル圏内に来て座ったり、寝転んだりして、私の行動をじっと眺めています。着かず離れずの関係を保って、猫は私たちをじっと見えています。猫を飼って初めて、夏目漱石が『我輩は猫である』を書いた動機が分かったような気がしました。

ところで、猫以外のペットと言えば、それは犬です。この犬と猫ほど対照的なペットはいないと思います。ある牧師は犬と猫を比較して次のようなことを説教しています。（『春名牧師マンガ説法：犬に学ぶな、猫に学ぶ』【信徒の友】1994.12.）。

犬は人間に本当に役に立っています。忠犬ハチ公、買物犬、盲導犬、警察犬、麻薬捜査犬、番犬等。それと比べると、猫は何の役にも立ちません。猫は何もしないでゴロ寝ばかりしています。かと思うと、襖に爪を立てたり、机からわざと物を落としたり、好奇心まるだしで、いたずらをします。にもかかわらず、猫はかわいがられています。なにもしないのに、ご主人様のフ

トンの中にもぐりこんできて、まるで子供のようにかわいがられています。それと比べ、忠実に働いても働いても、外の犬小屋で寝なければならぬのは犬です。これは不公平です。それなのになお、猫がかわいがられるのはなぜでしょうか。

スージー・ベッカー著（谷川俊太郎訳）『大事なことはみーんな猫に教わった』（飛鳥新社）という小さな絵本がそれに答えています。その訳者である詩人の谷川俊太郎さんが「訳者まえがき」でもっともおもしろいことを言っています。谷川さんは猫の身勝手さに手を焼き、悩まされながらも、それでも、その猫がかわいらしくて堪らないことを告白しながら、次のように述べています。

「猫は人間以上に自分勝手だということがよく分かります。私たちが猫から学ぶのは自分勝手に生きる方法です。自分勝手に生きて許されるにはどうすればいいのか、猫はそれを私たちに教えてくれます。簡単です。ただ純粹に無目的に自分勝手にしておればいいのです。権力や富や名誉や愛や正義を追求してはいけません。考えたり反省したりするのも禁物、過去も未来もなくただ一瞬一瞬をしたいようにする、それが秘訣です」。

その著者ベッカーが猫から何を学んだかを紹介します。

「毎日おんなじものを着たって大丈夫」

「眠ることをバカにしてはいけない。伸びも」

「少しは權威を示すこと」

「ひとりで楽しむこと」

「好奇心に富むこと」

「みともないことなんかすぐ忘れて、過去にあんまりこだわらないこと」

「呼ばれるたびに、行かなくてもいい」

「恥ずかしがらずに見つめる」

「寛容であれ——でもあまり言いなりになってもいけない」

「踏まれたら怒れ、踏まれたことを忘れよ」

「弱みを見せろ。しかし、食べ物を与える手を噛みつくことを忘れぬこと」

「毎日運動せよ」

「愛情は態度で示せ」

「自立を失わず人に頼るべし」

「自分自身を楽しむべし」

「そこにいるだけで、誰かをしていい気持ちにできるようにするべし」

先の春名牧師は説教でこの意味を敷衍して次のように言っています。

「それにしても、私たちはあまりにも自分を殺して、他人に気を使って、役に立つ人間になろうと苦勞しすぎているのではないのでしょうか（それは犬のような行き方です。そのため、息苦しくなり、腹が立ってきて、最後には、ウーワンと吠えなくなる）。神様は私たちが欠点があ

るがままで、その人らしい行き方をし、人生を楽しんでほしいと思っらっしゃるのではないのでしょうか。・・・自分の立派さ、完全さを打ち立てようとするのではなく、神様の愛と導きに人生の基盤をおいて、もう少し気楽に、猫に学びつつ生きてゆきましょう（なんでもいいニャーオと、ゆとりをおいて行くと、自分らしさが見えてきて、息しやすくなるのではないのでしょうか」。

この《マナ》との生活は2年間でしたが、《マナ》はそこにいるだけで、いつも私たちをととてもいい気持ちにしてくれました。しかし、去年の7月、《マナ》を白血病で失いました。それは、私の96年度の特別研究休暇中の最大の悲しい出来事でした。

（はしもと しげる

所員、社会学部教授)